

平成 30 年 5 月 30 日現在

機関番号：11301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26370009

研究課題名(和文) 同時代の受容と批判から再構成されるカントの超越論哲学

研究課題名(英文) Kant's Transcendental Philosophy in the Context of its Receptions and Critiques
by his Contemporaries

研究代表者

城戸 淳(Kido, Atsushi)

東北大学・文学研究科・准教授

研究者番号：90323948

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、同時代におけるさまざまなカント哲学の受容と批判を収集・整理し、それらに対する応答をカントの著作や遺稿などに跡づけることによって、同時代の思想的な脈絡のなかで、『純粹理性批判』から『オプス・ポストウムム』にいたるまでのカントの超越論哲学とその発展を再構成して解釈する試みである。とりわけ、超越論的演繹論の自己意識論や、観念論論駁について、同時代的なコンテキストから解釈することに尽力した。

研究成果の概要(英文)：In this project I studied Kant's transcendental philosophy in the context of its receptions and critiques by his contemporaries. Based on the collection and interpretation of reviews, elucidations, critiques, etc. of Kantian philosophy in his era, I provided a reconstruction of Kant's philosophical developments from Critique of Pure Reason to Opus postumum. In particular, (1) the theories of self-consciousness, (2) the development of Refutation of Idealism, and (3) the arguments for freedom were the key themes of this study.

研究分野：哲学

キーワード：カント 超越論哲学 18世紀 自己意識 観念論論駁 自由 ドイツ観念論

1. 研究開始当初の背景

(1) カントの超越論哲学を同時代の受容や批判のなかで再構成する試みは、近年の内外の研究動向から求められる研究企画であった。

まず、同時代の人々によるカント哲学に対する書評や批判について、資料的な整備が大幅に進んできた。1991年のランダウ編『カント書評集』に続き、英語圏でもいくつかの優れた編訳が出た。また、当時の文献のデジタル化の事業(一例をあげればビーレフェルト大学図書館による「18世紀と19世紀のドイツ語圏における学術的な批評機関誌と文芸雑誌の遡及的なデジタル化」)が進み、資料へのアクセスが容易になった。

さらに、カントからフィヒテやヘーゲルにいたるドイツ観念論の研究の進展も目覚ましい。バイザーやフェルスターなど、飛躍的な前進を示す研究が相次いだ。ただしこれらの研究の多くは、ドイツ観念論の形成史という観点からのものであり、カント哲学の発展に内在的な観点からの再構成ではない。

わが国のカント研究においても、初期ドイツ観念論の研究は幅広く展開されているが、哲学史的なカント研究の趨勢は遡って18世紀の啓蒙哲学に向かっており、『純粹理性批判』以後のカント批判とその応答については後手をとっている。本研究はこうした状況に答えるものであった。

(2) くわえて、これまで私は近代哲学史のコンテキストのなかでカントの『純粹理性批判』を読むという方向の研究を続けてきた。その成果は単著『理性の深淵 カント超越論的弁証論の研究』(知泉書館、2014年)として出版された。

この研究の結果として判明したのは、当時、イギリス経験論の受容、ライプニッツなどの合理論の遺産、ロマン主義への胎動といった諸動向が、『純粹理性批判』とそれ以降のカント哲学を基軸に、その応答や批判として集約的に展開されていたということである。カントの批判哲学の形成を、その文脈で解釈するという方向性が見えてきた。

その見通しを踏まえて私は、「ゲッティンゲン書評」やピストリウスの書評などを課題付きで訳出する作業を重ねていた。

2. 研究の目的

本研究は、同時代におけるさまざまなカント哲学の受容と批判を収集・整理し、それらに対する応答をカントの著作や遺稿などに跡づけることによって、同時代の思想的なコンテキストのなかで、『純粹理性批判』から『オプス・ポストゥムム』にいたるまでのカントの超越論哲学とその発展を再構成して解釈する試みである。

現在、ドイツ観念論の形成史について研究

が進展しているが、本研究はこれにカント研究の立場から応えて、一定のカント解釈として結実させる。

また、近代哲学の諸潮流が集約的に当時カントに対する諸批判として展開していたことを考えれば、本研究は近代哲学史におけるカント哲学の位置を同時代の具体的な文献資料に即して測る試みであり、これによってカント哲学の現代的意義にも見通しが得られるだろう。

あわせて、さまざまなカント批評を邦訳・紹介することで、カントの時代の思想的遺産を継承することを図る。

3. 研究の方法

(1) [範囲] 同時代におけるカント哲学といっても、いわゆる三批判書にとどまらず、歴史哲学や政治の諸論文、宗教論など多岐にわたり、影響も広い。今回の研究では、規模の制約や一貫性の観点から、おもにいわゆる理論哲学の局面を中心に遂行した。ただし、自由論にかかわる問題については、倫理学あるいは道徳哲学にまたがって、可能な範囲であわせて解明を試みた。

カントの理論哲学の受容と批判は「超越論的観念論」をめぐる始まり、やはりそこに収斂する。とはいえ、超越論的観念論を中心に、空間・時間論、純粹カテゴリーとその適用の問題、因果律の正当化、フェノメナとヌーメナの区別、アプリオリな総合判断の可能性など、広範な諸論点について論争が繰り広げられたのであり、これらは総じてカントの「超越論哲学 (Transzendentalphilosophie)」の構想と体系を問うものであった。

年代的には、本研究は『純粹理性批判』第一版から『オプス・ポストゥムム』までの超越論哲学とその発展史を視野に入れる。

(2) [方法と狙い] 同時代の人々によるカントの批判哲学に対する批判と、その批判によって惹起される批判哲学の増改築やカントによる反駁の全体は、Gegenkritik(反批判/反駁)とでも称しえよう。カントの時代には、ロックやヒュームなどのイギリス経験論の影響下にある人々や、ライプニッツやヴォルフなどの合理論的な思想遺産を継承する人々、あるいはカントを踏みこえてドイツ観念論の方向へと進もうとする人々など、さまざまな思想的潮流が並存しており、それゆえに多彩なカント受容と批判が展開されていた。本研究は、Gegenkritikの方法論によって、そのような同時代の複雑なコンテキストのなかでカントの超越論哲学の発展を再構成する試みである。

あわせて本研究は、当時のカント批評を邦訳・紹介することを第二の副次的な課題とする。すでに発表した邦訳に加えて、当時の代表的な書評やカント批判書を選んで邦訳し、

解題や註を付して、『カント批評選集』(仮)として刊行することをめざす(これはなお今後の課題である)。

(3)〔手続きと年次課題〕 研究の手続きとしては、本研究は次のような三段階に分けることできる。まず当時に著されたカントへの書評やカントに言及した書物・論文等を収集・読解し、論点を整理したうえで、カントの受容や批判の全体的な動向を把握する。ついでそれらの受容や批判に対するカントの応答を跡づけて、カントの側での論点の移動や拡充、新たな論証の試みなどの発展を再構成し、カントの同時代への対応として解釈する。最後に、このように同時代のコンテクストから再構成されたカントの超越論哲学の意義を、ひろく近代哲学史の地平に展開して解明し、その哲学的射程をさぐる。

研究は4カ年にわたり、各年度の課題は以下のとおりであった。平成26年度は『純粹理性批判』第一版に対する経験論者からの批判を検討し、『プロレゴメナ』から第二版への展開を追う。平成27年度は、その後の合理論者からの攻撃を主題的にとりあげ、『純粹理性批判』第二版の改稿と『エーバーハルト論駁』のコンテクストを解明する。平成28年度は当時の信仰哲学などとの関連も踏まえて、『純粹理性批判』第二版とその後の遺稿群における観念論論駁の問題圏を追跡する。平成29年度は『オプス・ポストウム』におけるドイツ観念論者とのカントの対話と、超越論哲学への最後の挑戦を再構成する。

4. 研究成果

(1)〔経験論者からの批判 『就職論文』から、『純粹理性批判』第一版と『プロレゴメナ』へ〕

まずは、カントの教授就任論文『感性界と叡智界の形式と原理』に対する諸批判と応答を再構成することが研究の出発点となった。その成果の一部として、論文「時間と自我

カント超越論的感性論第七節における反論と応答」を公表した。この論文は、時間の絶対的実在性を否定した1770年の教授就任論文に対して寄せられたメンデルスゾーンやランベルトからの諸批判に対して、カントがいかに1781年の『純粹理性批判』第一版の超越論的感性論において応答・反批判したのかを考察して、さらにはファルケンスタインなどの近年の有力な諸解釈の再検討を試みたものである。

『純粹理性批判』(第一版1781年)に対する反応は、ロックやヒュームなどから思想的影響を受けた経験論者たちによる批判から始まった。ガルヴェとフェーダーによるいわゆる「ゲッティゲン書評」がその皮切りになってカントの「観念論」が論難された(これについては次を参照のこと。城戸淳訳・解題

「ゲッティゲン書評(ガルヴェ/フェーダーによるカント『純粹理性批判』の書評)」、新潟大学大学院現代社会文化研究科『世界の視点 知のトポス』第3号,2008年)。その他にも、サッセンが整理しているように、感性論の空間・時間論、カテゴリーの導出とその客観的妥当性の問題、純粹主義への異義など、経験主義の陣営からは多岐にわたるカント批判が展開されていた。カントは『プロレゴメナ』において、カントの超越論的観念論をバークリー式の観念論と断ずる「ゲッティゲン書評」を反駁すべく、デカルトやバークリーの観念論から区別して、みずからの立場を「形式的観念論」へと限定する。経験論者からの諸批判は総じて、カントの超越論哲学を心理主義的に解するものであった。それゆえにカントは、1787年の『純粹理性批判』第二版への改稿においては、例えば、第一版の演繹論の「三重の総合」などの心理学を撤回し、第二版ではむしろ客観的演繹の論理主義へと舵を切ったものと思われる。

この研究の成果は、ひとまず「観念論論駁への途上でカントの超越論的観念論をめぐる批判と応答」として公表した。この論文は『純粹理性批判』第一版の第四誤謬推理、『プロレゴメナ』を経て、ついに『純粹理性批判』第二版の観念論論駁へといたるコンテクストを、当時のカント批判とそれに対するカントの応答として再構成する試みである。

以上のような経験論と超越論哲学との対立は、近代の哲学を分かť分水嶺であるにとどまらず、自然主義と超越論的論証との対立など、現代哲学にまでいたる問題系をなしている。初期の経験論的諸批判とそれらへの応答に即して、その哲学的な問題射程を測ることを試みた。

(2)〔合理論者からの攻撃 『純粹理性批判』第二版と『エーバーハルト論駁』〕

経験論者からの批判に続いて、ライプニッツやヴォルフの思想的遺産を継承する、いわば旧体制の合理論者からのカント批判が展開された。知性的認識と形而上学を擁護するこの陣営からの批判は、1788年創刊の『哲学雑誌』におけるエーバーハルトによるカント批判によって頂点に達する。このような合理論的カント批判は、ドイツ観念論へと繋がらないコンテクストであることもあり、研究が立ち後れている分野なので、資料の収集と整理から着手した。

この合理論的批判への応答はすでに『純粹理性批判』第二版にも刻まれている。すでに拙著『理性の深淵』第三章などにおいて指摘したように、ウルリッヒなどの合理論者からの攻撃が、第二版における誤謬推理論の全面改稿の一因であった。さらに、エーバーハルトの執拗な攻撃に対してカントは『エーバーハルト論駁』(1790)を公にする。この経緯を同時代のコンテクストから解明することによって、独断的な合理主義の形而上学に対

抗する、カントの批判的な超越論哲学の真価を測ることを試みた。

この研究成果の一部は、第12回国際カント学会(2005年、ウィーン大学)にて「カントの総合的統一とそのライバル」として口頭発表された(2018年刊行予定)。これは『純粹理性批判』第二版の超越論的演繹論における「総合的統一」の理論を自己意識論として解説して、さらにそれをデカルト、ライプニッツ、ヒューム、ヴォルフなどの近代哲学史のコンテクストのなかで再構築する試みであった。

なお、平成27年4月～9月まで、ドイツのハレ大学(マルティン・ルター大学ハレ・ヴィッテンベルク)にて、ハイナー・クレンメ教授のもとで客員研究員として活動した。ハレは18世紀のドイツ啓蒙のメッカであり、研究課題に必要な当時の古い資料を十分に活用しつつ、また当地に集う啓蒙研究の諸氏とも交流しつつ、有意義に哲学史的な研究に従事することができた。

(3)〔観念論論駁の問題圏 、『純粹理性批判』第二版とその後の遺稿群〕

観念論をめぐる攻防は、ゲッティンゲン書評以来のカント批判と擁護の中心点であった。フェーダーやエーバーハルト、ピストリウスなどからの論難に加えて、さらに当時沸騰していた汎神論論争とも絡んで、ヤコービの『スピノザ書簡』(1785)や『ヒューム論』(1787)などがカントの超越論的観念論をめぐる問題圏に関わっていた。この分野はドイツ観念論研究として研究が進展している分野であるが、カント哲学の観点から論争の推移と哲学的意義を整理することを試みた。

カント解釈としては、『純粹理性批判』第二版の「観念論論駁」を、このようなカント批判のコンテクストで再構成することが課題である。さらに、カントは1790年代にいたるまで遺稿において繰り返し執拗に観念論論駁を試みているが、この読解と再構成が課題となった(これは次を発展させる課題である。城戸淳訳・解題「イマヌエル・カント観念論をめぐる 一七八〇年代の遺稿から(R 5642, 5653-5655)」,新潟大学大学院現代社会文化研究科『世界の視点 知のトポス』第6号,2010年)。この観念論の問題については膨大な文献があるが、この問題を同時代的な思想状況から解析することが本研究の独自の課題であった。これによって、観念論という近代哲学の宿痾に対峙するカント哲学の洞察の細部と奥行きを解明することを試み、さらには概念主義や内在主義といった現代的な哲学的課題に対しても一定の視座を得た。

(4)〔『オプス・ポストウムム』とドイツ観念論〕

1790年代にはラインホルト、フィヒテ、シェリングなど、新時代のドイツ観念論を担う

ことになる哲学者たちが華々しく活躍する一方、カントは、フィヒテの知識学に対して冷淡な態度をとったことから覗えるように、新時代への胎動には背を向けていたように見える。しかし他方で晩年の遺稿『オプス・ポストウムム』においてカントは、超越論的観念論の代弁者として「シェリング」を指名し、さらには「スピノザの超越論的観念論」とさえ語る。『オプス・ポストウムム』は当時のドイツ観念論者たちとのカントの執拗な対話の記録であった。同時代の対話を重ねながら、最晩年のカントは「超越論哲学の最高点」を求めてタンタロスの努力を続けていたのである。

『オプス・ポストウムム』を同時代の文脈において解明することで、スピノザとドイツ観念論という対抗軸に対して果たす、カントの超越論哲学の独自性を明らかにすることを課題とした。残念ながら、この研究課題についてはいまだ研究成果を公にするには到っていない。主題的な研究論文のほか、『ドイツ哲学・思想事典』(ミネルヴァ書房、刊行予定)などでの研究成果の発表を予定している。

(5)〔同時代の受容と批判におけるカントの倫理学〕

本研究は主として理論哲学を中心領域として展開されたが、自由論をめぐる問題圏をめぐっては、実践哲学の分野にも研究は及んだ。その一環として、アリソン著『カントの自由論』の邦訳を出版した。同書には、カントの自由論をラインホルト、シラー、ヘーゲルなどのコンテクストで位置づける重要な議論が含まれている。

また、論文「自律の方式へ カントの定言命法の諸方式」では、カントの定言命法の諸定式、とりわけ自律の方式を、ルソーやヴォルフとの対比のなかで位置づけることを試みた。

カントの自由論については、さらに『思想』(岩波書店)にて論文を執筆する予定である(2018年秋刊行予定)。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計4件)

1 城戸淳「時間と自我 カント超越論的感性論第七節における反論と応答」,東北大学哲学研究会編『思索』第47号,2014年10月,199~219頁.

2 城戸淳「観念論論駁への途上で カントの超越論的観念論をめぐる批判と応答」,『Νύξ(ニクス)』第2号,2015年12月,130~145頁.

3 城戸淳「書評 望月俊孝著『物にして言葉 カントの世界反転光学』」,日本カント協会編『日本カント研究』,第17号,2016年7月,186~190頁.

4 城戸淳「自律の方式へ カントの定言命法の諸方式」,東北大学哲学研究会編『思索』第49号,2016年10月,1~21頁.

〔学会発表〕(計5件)

1 合評会「城戸淳『理性の深淵 カント超越論的弁証論の研究』を読む」,哲学/倫理学セミナー 第102回例会,提題者 滝沢正之+山蔦真之,2014年12月20日,文京区民センター

2 合評会 城戸淳著『理性の深淵 カント超越論的弁証論の研究』,カント研究会 第287回例会,特定質問者 長田蔵人+佐藤慶太,2015年1月25日,法政大学

3 城戸淳「時間と自我 カント超越論的感性論第七節における反論と応答」,カント研究会 第288回例会,2015年2月22日,法政大学

4 Atsushi Kido, "Kant's Synthetic Unity of Apperception and Its Rivals," 12. Internationaler Kant-Kongress, 2015年9月21日, Universität Wien.

5 城戸淳「宇宙論的自由と叡知的性格 アリソン『カントの自由論』に寄せて」,第30回新潟哲学思想セミナー(NiiPhiS) ヘンリー・E・アリソン『カントの自由論』刊行特別企画ワークショップ,コメンテーター 宮村悠介(愛知教育大学助教),2018年3月15日,新潟大学

〔図書〕(計3件)

1 城戸淳訳,ヘンリー・E・アリソン著『カントの自由論』(叢書・ユニベルシタス1060)法政大学出版局,2017年8月,viv+486+72+xviii頁.

2 城戸淳「英米圏のカント研究 経験論の伝統」,牧野英二編『新・カント読本』(共著),法政大学出版局,2018年2月,総422頁,21~32頁.

3 Atsushi Kido, "Kant's Synthetic Unity of Apperception and Its Rivals" in: *Akten des XII. Kant-Kongresses 2015*, Berlin / New York, Walter de Gruyter, 2018(印刷中)

6. 研究組織

(1)研究代表者

城戸 淳 (KIDO, Atsushi)

東北大学・大学院文学研究科・准教授

研究者番号: 90323948